



# 2014年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として1998年4月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とします。

書類提出期間：2014年10月1日(水)～2014年10月24日(金) 17:00まで  
 書類提出先：学生部学生厚生課奨学金係・新座キャンパス事務部学生課・独立研究科事務室  
 採用発表：11月28日(金) 学生部学生厚生課奨学金掲示板、新座キャンパス事務部奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板(10号館通路)に掲示予定  
 授与式：12月上旬(予定)

## (A) ジェンダーフォーラム論文賞

対象：学部学生・大学院生(個人・団体)  
 支給額：優秀：10万円、佳作：5万円  
 採用件数：1～4件  
 選考方法：論文審査  
 提出書類：①ジェンダーフォーラム論文賞申込書\* ②論文(日本語2万字以内の未発表論文)  
 備考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。

## (B) 活動・研究助成金

対象：学部学生・大学院生(個人・団体)  
 支給額：総額20万円  
 採用件数：1～2件  
 選考方法：書類審査・面接  
 提出書類：①活動・研究助成金願書\* ②奨学金使途を含む活動・研究計画書(A4用紙3枚程度 書式自由)  
 面接日時：2014年11月19日(水) 18:00～を予定。個々の面接時間はあらかじめ連絡する。  
 面接会場：立教大学池袋キャンパス、2号館1階会議室(予定)  
 備考：採用者(団体)は活動・研究の中間報告を翌年3月末に提出の上、最終的な報告書または論文を11月末に提出すること。提出の活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】  
 標記の申込書(願書)で取得した個人情報、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は『年報』に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、ジェンダーフォーラムのホームページ(<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>)を参照すること。

※ 詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。

ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス6号館1階) Tel:03-3985-2307 E-mail:gender@rikkyo.ac.jp

\* 申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課窓口、新座キャンパス事務部学生課、独立研究科事務室窓口にあります。ホームページ上からもダウンロードできます。(http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/)

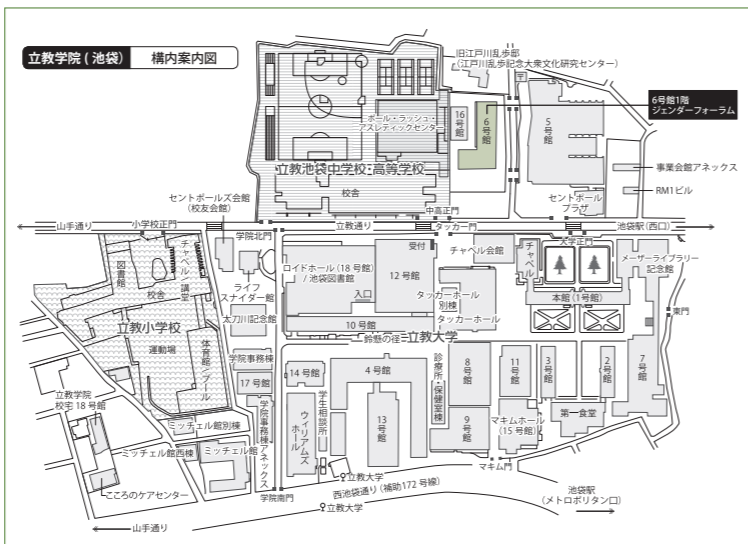


ジェンダーフォーラムはどなたでもご利用できます。お気軽にご入室下さい。

## 立教大学ジェンダーフォーラム

開室日：毎週月曜日～金曜日  
 開室時間：10:00～16:00  
 場所：立教大学池袋キャンパス6号館1階  
 TEL&FAX：03-3985-2307  
 E-mail：gender@rikkyo.ac.jp  
 URL：http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPをご覧ください。



# Gem

Rikkyo Gender Forum  
News Letter



2014年度公開講演会(2014年6月7日(土))

## 映画『レオニー』上映会 & 松井久子監督講演会

今年度の公開講演会は、21世紀社会デザイン研究科との共催で、映画監督の松井久子氏をお迎えして開催した。映画上映と監督の講演会の組み合わせという、ジェンダーフォーラム講演会初の試みである。

まず、司会の21世紀社会デザイン研究科の萩原なつ子先生による、松井久子監督とその作品についてのお話の後、松井監督に一言いただき、上映会が始まった。

レオニーはニューヨークでヨネ・ノグチと知り合い、編集者として、のちに妻として、ヨネの作品を世に出すことに力を注いできたが、ヨネは日露戦争を理由にレオニーをおいて日本に帰ってしまう。レオニーは実家に戻り、ヨネの子供を出産するが、しばらくしてヨネに呼ばれて日本に渡る。ヨネは子供にイサムと名付け、家と仕事を用意してくれたが、「日本では女は男の後ろを黙って歩くものだ」「男が家を2軒持つことは珍しくない」と本妻の家に行きもする。やがてレオニーはイサムを連れて家を出て、異国の地でイサムを育てていく・・・。

上映会の後には松井監督の講演が行われた。今回の映画は日米合作で、制作にあたりハリウッドではどんな作品を作ろうとしているのかが重要とされた。しかし、日本映画界では、女だ、この年だ、実績がない、無名だ、といったことが制約になった。また、レオニーについて、「こんな強い女性は客の共感を得ない」と言ったプロデューサーがいたが、それは日本ではこれまでずっと男が求めた女性像で映画が作られてきたということだ。そんな監督のお話から、映画の中だけでなく、映画制作の段階からジェンダーの問題にさらされていることがわかる。

イサム・ノグチの名は知っているが、その母であるレオニーについては知らなかった、そんな人が多いと思う。日本人で最初に英語の出版物を出したヨネ・ノグチと世界的に有名な彫刻家イサム・ノグチを、そのように支えた女、育てた母であるレオニー・ギルモアという女性がいた。イサム・ノグチの映画を撮ろうとする男性監督はどこかにいるだろう。しかし、レオニーについて伝えるのは世界に自分だけだ、という使命感に燃え、ジェンダー問題に翻弄されながらも松井監督が努力されたからこそ、私たちはこうしてレオニーという女性を知ることができた。今回の上映は海外配給用として単純な時間軸に編集し直したアメリカ公開版だが、30分長い日本版もぜひ見たい。

ジェンダー初心者、初めて委員としてジェンダーフォーラムの講演会に参加し、映画「レオニー」と監督のお話により、ジェンダーについて考えることができた。そしてそれは現在も続く問題であることを知った。松井監督の次回作が待ち遠しい。

伊東 理絵(ジェンダーフォーラム運営委員/本学職員)

リレーコラム 

「働く父」とジェンダー

和田 悠 (ジェンダーフォーラム所員 / 本学文学部准教授)

「ポストの数ほど保育所を」というスローガンが登場したのは1963年のこと。戦後の保育所づくり運動は高度成長期を代表する社会運動といえよう。高度成長期は高校家庭科の女子必修にみられるように主婦化規範が強まった一方で、教員や公務員、看護師などの専門職を中心に女性が結婚・出産後も働き続ける風潮も高まった。主婦化と雇用労働者化のせめぎあいのなかに高度成長期の保育所づくり運動の歴史的な位置がある。

私は、1960年代の大阪府枚方市香里団地で展開した保育所づくり運動を研究対象としている。香里団地は住宅公団が手がけた団地で、1958年に入居開始。「東洋一のニュータウン」と呼ばれた大規模団地であった。入居者の中心は20~30代の若い夫婦とその子どもで、「共稼ぎ」の夫婦による乳児保育を含む保育所に対する要求が一定程度存在していたことから、1960年9月から保育所づくり運動は始まり、住民による猛烈な署名や陳情活動によって議会や行政を動かし、1962年7月に市立香里団地保育所が開設された。

実際の運動を担った人々たちへの聞き取りを行ない、それらを同時代の文献資料と照らし合わせながら運動経験の歴史的意味を、私はジェンダーの視点から考えてきた。保育所づくり運動ときくと、その担い手として「働く母」をついイメージしがちであるが、「働く父」もまた高度成長期の保育所づくり運動の主要な担い手であり、ジェンダーの視点ということで注目をしてきたのは、保育所づくり運動を経験することで「働く父」は自らの男性性をどのようにとらえ返したのかという男性の主体形成の問題であった。


香里団地保育所づくり運動の担い手は、世代でい

ば1930年代生まれの「戦後派」である。「小国民」として戦時中に軍国主義教育を受け、しかし戦後には一転して民主主義教育を受け、日本国憲法を新鮮に受けとめた世代である。彼らは憲法にある「男女平等」に対する価値意識を持っている一方で、子育ては母親の領分であり、私的なことであるという認識も根強く持ち合わせていた。

そういう男性たちが、本意であったかもしれないが「共働き」という生き方を選択し、市民運動としての地域の保育所づくり運動にかかわることになった。その過程で彼らは職場や家族とは異なる人間関係を、地域コミュニティを具体的に経験し、そこから「プライベートなことは社会的である」という認識を主体的に獲得していった。こうした認識があったればこそ、男性たちは同時代の主婦化規範にからめとられることなく、むしろ「子育ての社会化」をこそ新しい社会の常識にしていく運動に戦後の価値を見出したのである。

ひるがえって現在、「共働き」というライフスタイルは見慣れた光景になっているものの、「子育ての社会化」の思想は社会に十分定着したとはいえない。日本の子育ての文化状況は〈内容なき形式化〉とも形容し得るものであり、それはファシズムが進行する日本社会に見合っているとさえいえるのかもしれない。こうした状況を切り拓いていくために、私たちはジェンダーの視点を踏まえた子育ての思想を必要としているのであり、ここに戦後の保育運動を振り返る意味もある。このように、小学校1年生と4歳の保育園児をもつ「働く父」である私は考えている。



 **文献紹介**

**「ジェンダー研究の現在—性という多面体」 / 新田啓子 [編]**

(立教大学出版会、2013年)

現在、ジェンダーについての授業や研究があらゆる大学でさかに行われていますが、非常に多様な側面を持つ性という問題について、どのような姿勢で関わればよいのでしょうか。本書では、文学作品、慰安婦や軍国主義といった歴史問題、そして代理母や開発などの社会的実践と、性にまつわる様々な問題が取り上げられています。こうした多岐にわたる現象について、徹底的に深く考え抜き、その問題を形づくる社会構造を問い直すという実践こそが、ジェンダー研究に求められるものではないかということ、この本は提示してくれているように思います。

(ジェンダーフォーラム事務局)

第62回ジェンダーセッション (2014年7月1日(火))

**「日本の社会経済的变化と男性性の変容**  
**— 「草食系男子」「オタク」「ネトウヨ」**

登壇者：熊谷圭知氏 (お茶の水女子大学教授)

第62回ジェンダーセッションは、お茶の水女子大学の熊谷圭知教授が、日本の社会・経済的变化の中で生まれてきている男性性の状況と、その問題点を「草食系男子」「オタク」「ネトウヨ」を例に講演された。

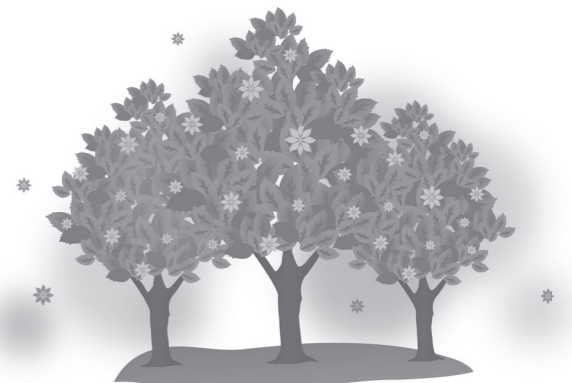
小学4年生と1歳の二人の息子さんを持つ熊谷先生は「プライベートなことは政治的なことである」として、自らのエネルギーの40%を研究教育、40%を家事育児に割いていると自己紹介した。


熊谷先生によると、高度経済成長期において日本の男性は、長時間労働で企業に奉仕し、稼ぎ手としてのアイデンティティを持っていたが、バブル経済の崩壊によって、こうした男性と家族のモデルが崩壊。一方、2000年代前半から、ニート、フリーター、ひきこもりなど「若者問題」が浮上し、それまでの男らしさや男性性の基盤が崩れたと指摘した。そして、家族とジェンダーが変化する中で生まれてきた「草食系男子」「オタク」、それに「ネトウヨ」に言及。この3つは「内向性」と「他者(性)の欠如」を問題として内包していると述べた。

「草食系男子」については、2010年、お茶の水女子大学で103人の学生・教職員を対象に調査をしたところ「友人としては好感。しかし、恋人・パートナーとしては不満・不安」といった結果が出たという。「オタク」については、秋葉原でインタビューした30代の会社員の自己像を紹介。「普通の見かけとギャップがあり、異文化の人と話をしている感じがした」と語った。また、「ネトウヨ」については、「オタク」と重なる部分があるとし、これまでのいくつかの研究結果を踏まえ、現状に不満を持つこうした若者に危険性を感じると述べた。その上で熊谷先生は、「草食系男子」「オタク」、それに「ネトウヨ」は、いずれも自己を揺るがす他者との関係性が欠如していると問題点を挙げ、自己が変わり、豊かになるための他者との出会いや対話ができる「開かれた場所」の構築がわれわれの課題であると講演を結んだ。

講演後の質疑応答では、中年の男性から「草食系男子」について「家父長的な男性意識と違って、こうした男性がどんどん増えたほうがいいと思う。むしろ、女性たちがこうした男性に魅力を感じないのが問題だと思う」という感想が出された一方で、「『草食系男子』と『オタク』は同じ分類だが、『ネトウヨ』はそれとは対照的だと思う」という意見も出された。

鷲見 徹也 (元横浜国立大学講師)



 **ドキュメンタリー映画**

**『何を怖れる—フェミニズムを生きた女たち』のご紹介**

2014年度ジェンダーフォーラム公開講演会でご講演いただいた松井久子監督から、次回作『何を怖れる—フェミニズムを生きた女たち』のご案内がありました。今回のテーマは、日本の女性解放運動の歴史において第二派フェミニズムと呼ばれる1970年代のウーマン・リブです。日本のフェミニズムの発展に貢献した女性たちは、どのようにこの運動に関わってきたのでしょうか。当事者の貴重な証言をもとに、彼女たちの活動の軌跡を後世に伝えたいという監督の熱い思いが込められています。詳細は以下の公式ホームページをご覧ください。映画製作サポーターのご案内もございます。

<http://feminism-documentary.com/>

(ジェンダーフォーラム事務局)